

川の本

1999 春の号

No. 46



カヌとウサギの合戦

(宮城県古川市)

伝説再話)

むかし、江合川(えいがわ)と鳴瀬川(なるせがわ)とが、お倉場(くらば)というところで、くつついでたところのお話です。

ある夏の夜のことです。お倉場に一軒だけ小さなあかりがともる小屋(こや)がありました。中では川漁師のおじいさんが、一人であみのやぶれをなしていました。すると川のほうで、ざざつと、波の音(おと)がして、ぶるぶるっと水をきる音(おと)もきこえました。

「はて、この夜ふけになんじやろ」

ふしぎに思つたおじいさんが戸を開けてみると、なにやら長くてぬるぬるしたものがこちらにやつてきます。びっくりして戸をしめようとしたしましたが間にあいませんでした。長いからだがねるつと小屋の中にはいつてきました。おどろいているおじいさんに、「どうかおどろかないでください。私は江合川の主のうなぎです。おねがいがあつてまいりました」

「さういって、ていねいにおじぎをして話をつづけました。

「じつは、あすの晩、この前の川で、鳴瀬川の主のかめと合戦することになったのです」

「えーっ、あのらんぼう者の大がめと合戦する。それはまだどうして

「はい、ちかごろ江合川の水が鳴瀬川にどんどん取られてしまい、江合川はすっかり浅くなってしまいました。しかたなく、わたしは鳴瀬川でくらしているのです」

「それで、大がめが出て行けといいうのだな」

「江合川の水を取つておいて、出て行けとはあんまりです。私も川の主です。おめおめと引き下がることなどできません。このうえは戦うしか

ありません、どうかおじいさん、みかたになつてください」

「しかし、このわしにどうしろというのかね」

「私がいくら力じまんの大うなぎでも、石のようとかたい甲羅(こうら)をもつたあの大がめには勝ち目はありません。もし私が弱気になつてひるんだとき大声ではげましてほしいのです。あすの晩、丑の刻(夜中の一時)です、どうかおねがいします」

そういうおわると、大うなぎは、するつとあとずさりしてくらやみの中に姿をけしました。

つぎの晩、おじいさんは水神さまのお守りを、おでこにしばりつけ、

どきどきしながら川のようすをうかがつていました。

ちょうど丑の刻になつたころです。きゅうに川の水がもりあがつたかとおもうと、いきなり天までとどくよくな水しぶきがまいあがり、大がめと大うなぎのすさまじい戦いがはじりました。はげしく水をうつ音は地ひびきをたて、あたりは水しぶきで見えないほどです。くんづほぐれつ、しばらく戦うちに、さすがの大うなぎも力がつきてきました。ここぞとばかり大がめは、大うなぎの頭めがけてふとい前足をふりおろそつとしました。

そのときです、おじいさんは、われをわすれて大声でさけびました。

「やめろつ、やめろつ、やめんと水神様の罰がくだるぞつ」

そつさけびながら、おじいさんはあたまにしばりつけていた水神さまのお守りをたいてみせました。

大がめはおどろいて、ふりあげた前足をひっこめると、あわてて水の底へにげていきました。

あやういところをたすけられた大うなぎは、おじいさんに、これから
は江合川の主らしく江合川でくらすことをやくそくして、なんどもお礼
をいいながら自分の川へもどつて行きました。

その後、なにごともなく、やがて秋がちかづいたころでした。空がく
ろい雲におおわれると、たちまちはげしい雨がたきつけるようになり
だし大あらしになりました。その中をどこからあらわれたのか白い着物
をきたお坊さんが、すずをふりながら大水になることを知らせてまわつ
てています。おどろいた村人たち、あわてて高台へにげました。

まもなく、ごごうつと、おそろしい音をひびかせて津波のような大水
がおしよせてきました。お坊さんのいうことを信じなかつた人は、あつ
と/or/いう間におし流されました。

そのすぐかつたこと。流れてきた土砂で、江合川と鳴瀬川とのつなが
つていたところがつまり、二つの川を別々に分けてしまつたほどでした。



二つの川が起こした洪水の話

しかし、そのおかげで、大うなぎがすむ江合川の水は鳴瀬川にとられることもなくなり、たっぷりと水が流れるようになりました。

ところで大水を知らせてくれたお坊さんは、いつたいなものだったのでしょうか。じつは江合川の主の大うなぎだったのですが、お倉場のおじいさんだけは、しつかりと気がついていました。

「ありがとう、ありがとう。それに、おまえさんも安心してくらせるようになつて、よかつたなあ」おじいさんは、漁にてるたびに江合川にむかつて語りかけたということです。

このお話では、乱暴者は鳴瀬川のかめになっていますが、口碑伝説として残る話では、乱暴者は江合川のうなぎになっています。

江合川のうなぎが鳴瀬川に乱入してきて、自分の川にしようとする。そこで年老いたかめはお薬師様に助けを求めるという筋書きです。

いずれにしてもこの話は、江合川と鳴瀬川の二つの川が合流地点でぶつかり氾濫を起こす洪水のすぎまさ話を語つたものではないでしょうか。この二つの川は、奥羽山脈から、並ぶようにして平野を流れていますが、現在は古川市のはずれで、新江合川という水路で結ばれています。

ところが新江合川は立派な堤防があるのに水が流れていません。川底まで草原になつていて対岸を結ぶ通路まであります。

つまりこの川は、洪水のときだけ活躍する放水路なのです。江合川本川との境は、越流堤（洪水が、一定量を超えたときだけ流れ込める仕組みの堤防）で仕切られています。

こうしたことからわかるように、この地域は洪水の氾濫が起りやすいところでした。昔は洪水のたび、江合川の流れ路が変わって、鳴瀬川とついたり離れたりしていたと考えられています。古川という地名も古くは川であったといふところから来ているということです。

そのような地域の特徴をみると、かめとうなぎの合戦の伝説の背景がみえてきておもしろいですね。



すいしゃ 水車

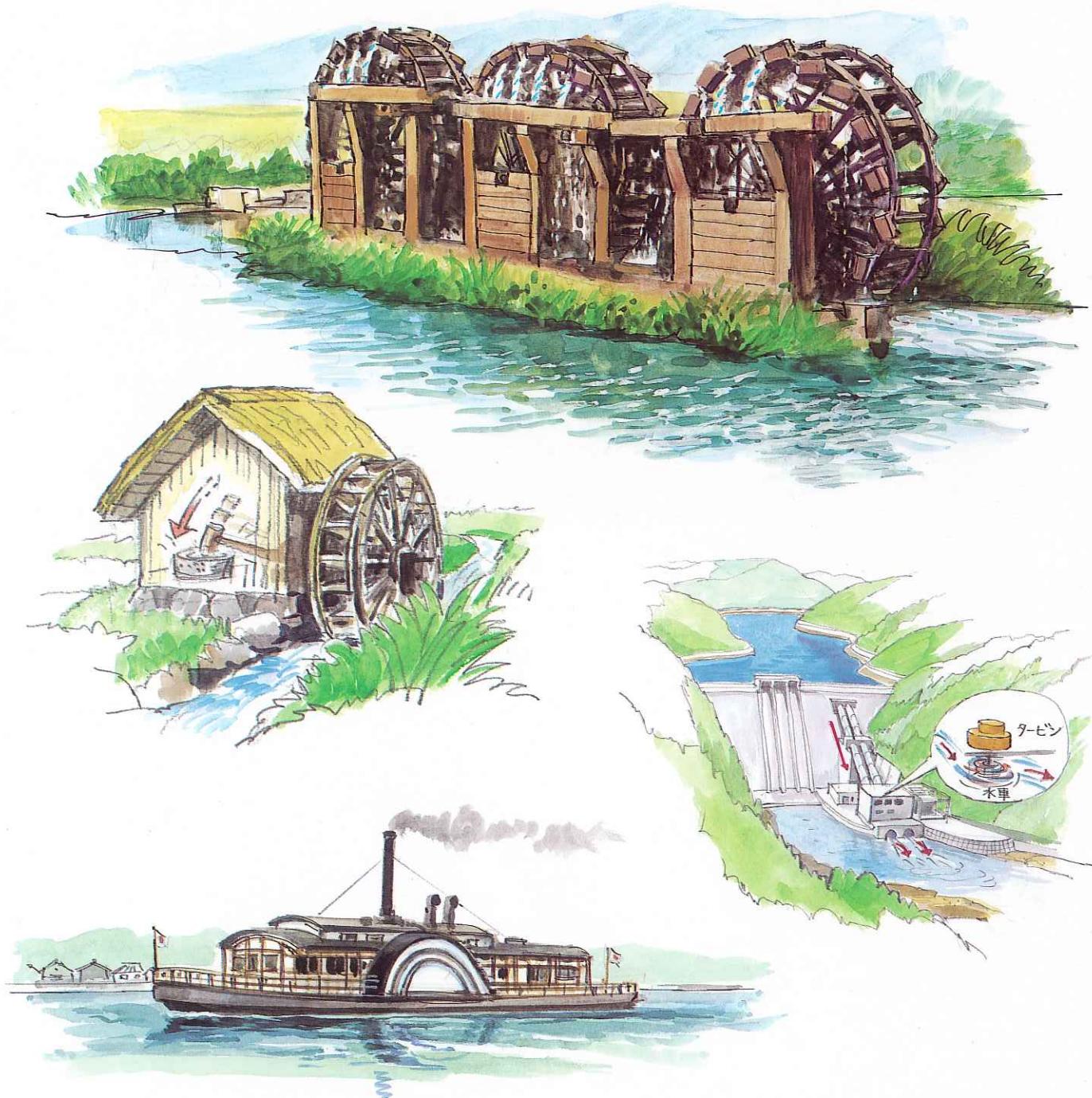
水車は昔の人のすばらしい知恵だ。

見た目にはおだやかな川の流れでも、水が押してくる力はおどろくほど強い。この力を利用して水車は回る。水車の回る力を動力にして、いろいろなことができる。水車に、たくさん小さな箱のような桶をつけ水をくみあげれば、低い土地から高い土地の水田にも水を運ぶことができる。水車にきねをつなげると、穀物をくだいて粉にする製粉機にもなる。他に穀物の脱穀、なたね油しぼり、陶器の材料となる土くだき、糞打ち、木工ろくろまわし、など、水車は、電気のない時代の産業に、なくてはならない動力エネルギーをつくりだした。

今ではポンプに切り替わりほとんど見かけなくなつたが、現在、残されているものなかで有名なのが福岡県朝倉町にある「菱野三連水車」だ。貴重な文化遺産を保存しようという地域の人々の努力によって、大切に運営されている。

近代になると、ものすごい勢いで回る水車が登場した。水力発電に使われるタービン（水車）だ。ダムにためた水を太く長い管の水路で勢いよく下に落として、その強い水流でタービンの羽を回す、そのものすごい力で発電機を回し電気を起こすというわけだ。

明治時代、東京の隅田川や大阪の淀川などに登場した蒸気船の両脇には水車がついていた。水車を回したのは、水の流れではなく、蒸気の力だ。蒸気の力で水車が回り、水車が水を擣いて船を動かした。



・ゲンゴロウとなかまたち

春の小川をのぞいて見よう、水の中にすむ昆虫にであるぞ。
水生昆虫の仲間にはホタルやトンボのように幼虫のときだけ水の中でくらし、成虫になると水からでて、飛んでいくもののほかに、成虫になつて飛べるようになつても、ほとんど水の中でくらす昆虫もいる。その中でも、人気もののゲンゴロウとその仲間を紹介しよう。

マメゲンゴロウ
たいらうやく
体長 約6.5~7.5ミリ

ぼくの名を漢字で書けるかな
げんごろう
源五郎と書くのだ。

みどり色で黄色っぽいふちどりがある。
ゲンゴロウの中では一番大きいぞ。
ぼくこそゲンゴロウの王さまだ。
まちがえないでくれたまえ。

ゲンゴロウは肉食で、オタマジャクシ、メダカなどの小魚、
カワゲラなどの水生昆虫などを餌にする。

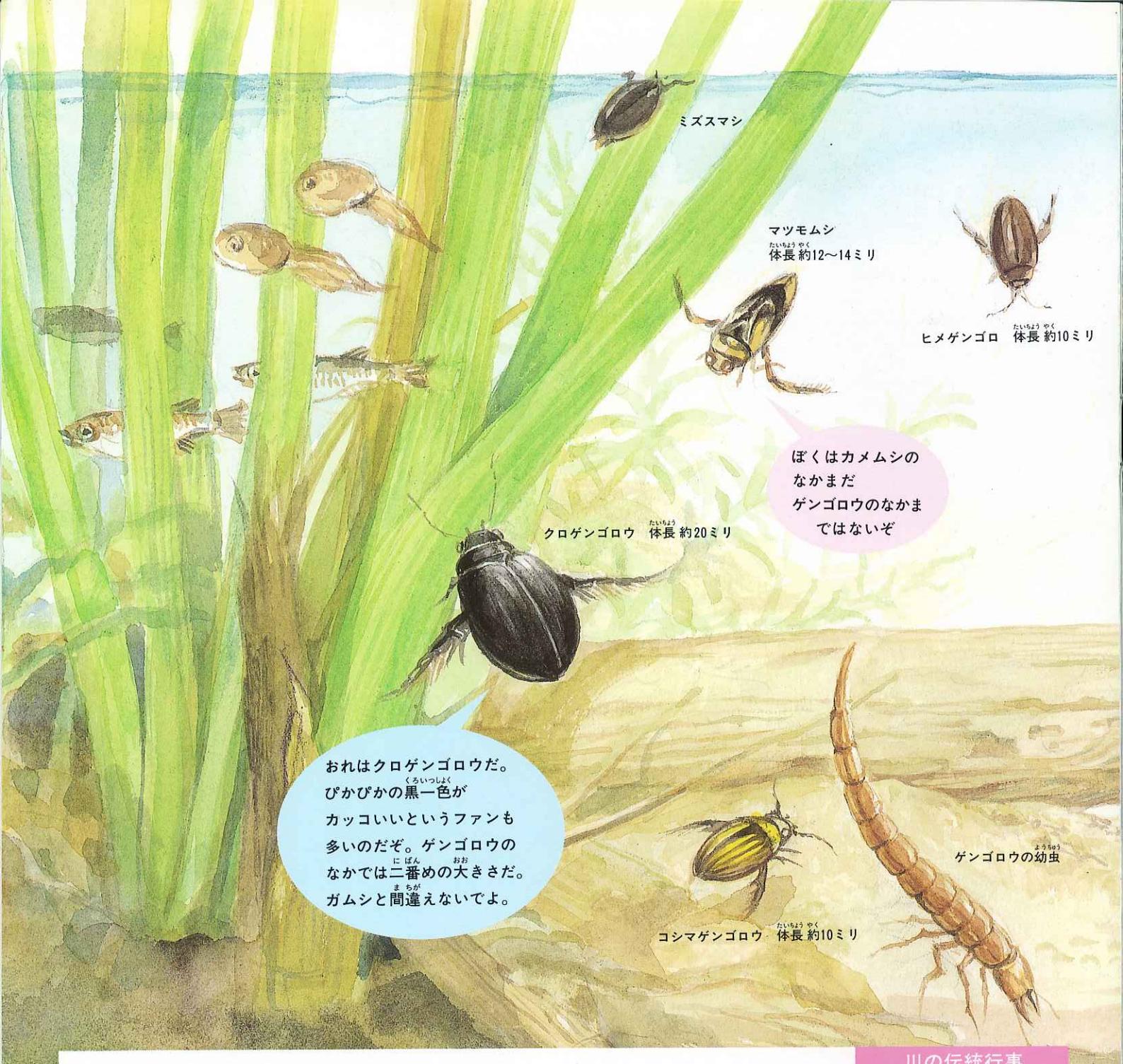
シマゲンゴロ たいらうやく
体長 約15ミリ

ガムシ(ガムシ科)

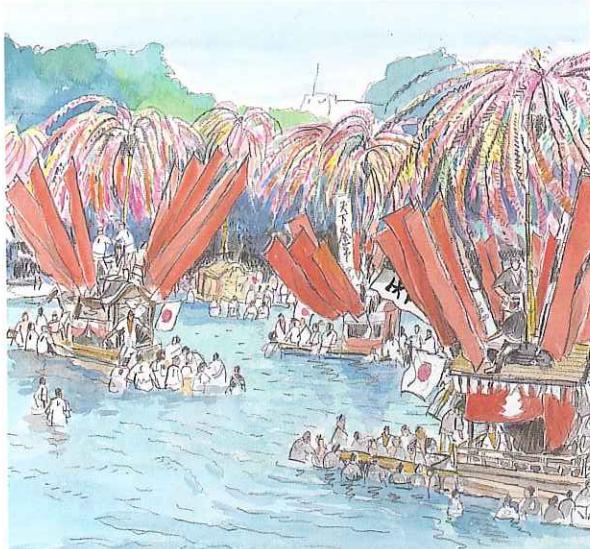
ガムシは足の形がゲンゴロウとはちがう
泳ぐのはヘタだ。

川へ行くとき これだけは守ってほしい
・一人ではぜったい行かない。・友達とでかかるときも大人の人といっしょに行く。・人のいいところでは遊ばない。・行先はかならずといって行く。・人のいるところで石をなげない。・おやつやおべんとうのあとかたづけはきちんとし、ぜったいちらかさない。
・切れた釣り糸なども捨てないでもちかえる。





川の伝行事



風治八幡川渡り (福岡県田川市)

毎年、五月第3日曜とその前日、風治八幡宮から五キロメートル離れた彦山川を舞台にくりひろげられる川渡り神幸祭。

初日の祭典後、六十人びきの大神輿、四十人かきの神輿、各町内から集まつた幡山笠、鉦や太鼓の踊山笠が街を練り、午後四時ごろ、いよいよ彦山川の川渡りが始る。川幅は約七十メートルだが、神輿も山笠も川底の石にさまたげられて、前後左右にゆれ動く。鉦や太鼓のにぎやかなおはやし、あでやかな旗幟物がゆらぎ、壯觀なクライマックスをむかえる。約二時間かけて対岸のお旅所へ渡り、そこで一泊する。翌日、お旅所広場で練りまわり、午後三時ごろ再び彦山川を渡つて神社へ帰る。

起源は、永禄年間(1559~1570)この地に流行した疫病の退散を祈願した際、その成就のお礼として始められたものだという。

この行事の中心となる彦山川は、かつて鉄道がひかれ、今まで筑豊の石炭を積んだひらだ舟が行き交う舟運路として活躍し、田川市も石炭の街として栄えた街である。

かわみず 川の水はどこからくるの

「川の水のもとはなに」と聞かれて、「雨水だよ」と答えられれば、君は、天才レオナルド・ダ・ビンチより物知りということになる。ダ・ビンチは、大河の水は雨水だけでは、とても足りないと思った。川の水のほとんどは海水が地下の割れ目を通って山の上に押し上げられ湧き出したものだと考えたそうだ。

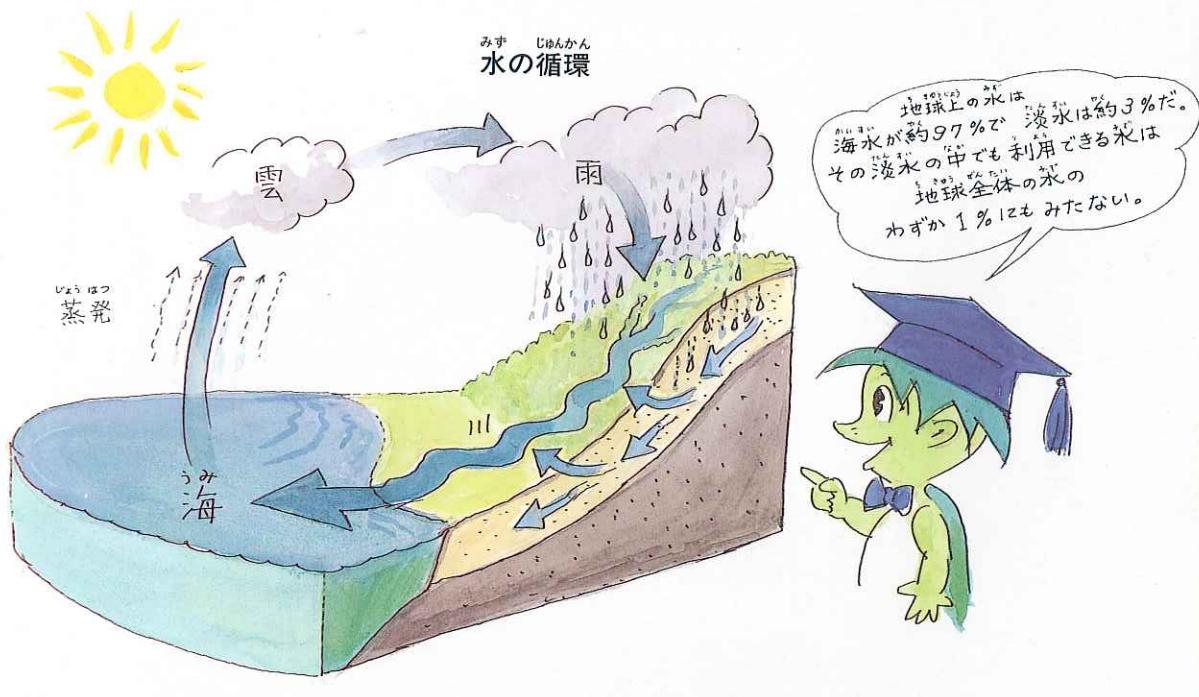
外国の川は、一般的に日本の川とは比較にならない長さだ。しかも雨量は日本より少ない。昔の人は、それほど雨も降らないのに、いつもたっぷりと水をたたえて流れる大河を見て、雨水が集まつたものだとは考えられなかったのかも知れ

ない。

それにくらべ日本の川は短くて急流だ。雨が降ればすぐ増水し、日照りが続けば干上がってしまう。

水をたっぷり使う稲作にたよってきた日本人々は、昔から雨と川の水の関係をよく知っていた。川の水が少なくなると雨乞いの祈りをささげ、大雨が降れば洪水を心配して川を見張った。

水は地球を循環している。海の水が蒸発して空にのぼり雲になる。雲は雨になって降り、山の土にしみ込んだり湧き出したりする。そうした水が川になり、海に帰って行く。



河川環境管理財団は
みんなに愛される川であるように、こんな仕事をしています。

- * よりよい水辺のプランニング
- * 楽しく安全に遊べる川づくり
- * 川をきれいに、川を愛する心を育ぐくむ運動
- * 未来の水辺を考えた調査や研究
- * せせらぎ・ふれあい基金

●この本は再生紙を使用しています。

監修 建設省河川局